

# 情けは人の為ならず～震災に思う

## 情けは人の為ならず～震災に思う

国内観測史上最大規模となった東北地方太平洋沖地震。震源地から離れた当施設でも開設以来最大の揺れを感じたくらいですから、震源に近い地域の揺れと恐怖は計り知ることが出来ません。更に想定をも遥かに凌駕した大津波が押し寄せ、地震と併せて東北地方沿岸部を中心に壊滅的な被害をもたらしました。

被害を受けた皆様に心よりお悔やみとお見舞いを申し上げます。



震災後、ある利用者様より「被災地の方々に募金をしたい。自ら機会を作る事が難しいので、募金箱を設置してほしい。」というご要望を頂いた為、事務所前に募金箱を設置しました。この募金箱には、利用者様並びに多くのご家族様や職員から支援が寄せられています。皆様のご支援は中央共同募金会を通じ被災地へ届けて頂きますので、今後も可能な範囲でのご協力をお願い申し上げます。

今回の震災では 170 以上の国や国際機関から支援の申し出があったそうです。中でもイスラエルはおよそ 50 名の医療スタッフとともに宮城県南三陸町の避難所へ向かい、プレハブの仮設診療所を設置し、およそ 2 週間診療や往診を行い、診療所と多くの医療機器を残し帰国しました。「なぜイスラエルが？」という疑問があるかもしれません、その背景に故杉原千畝氏の功績があるのだろうと感じています。

杉原氏は第 2 次世界大戦中にリトアニアという国の領事をしていた人物です。当時はナチスドイツがヨーロッパの多くの地域を支配し、ユダヤ人を迫害していた時期でもあったため、ユダヤ人がこの地域から逃れるにはシベリア～日本を経由するしかない状況でした。そのため日本を通過するためのビザを必要としていた数千人のユダヤ人がビザの発行を求めてリトアニアにやってきました。

杉原氏は何度も外務省にビザ発行の許可を求めました。しかしながら当時の日本は日独伊三国同盟を結んでいた時期であり、ドイツに敵対するような行為を認める訳にはいかないためか、その回答はことごとく「否」というものでした。それのみならず、リトアニアからの早期の退去指示が出されたのです。

「外交官である以上、国の指示に従う責務がある」「ビザを発給しなければこのユダヤ人たちの命はない」

この反する 2 つの考えに悩みぬいた杉原氏は、ついに国家の意思に背いてビザを発行する決意をしました。退去期限ぎりぎりまで寝る間も惜しんで毎日およそ 300 枚ものビザを発行し、退去する際には列車の窓から身を乗り出してビザを発行し続けたそうです。結果的におよそ 6,000 人ものユダヤ人の命を救ったのです。

今回のニュースに接し「情けは人の為ならず」という言葉を思い出しました。70 年以上前に受けた恩がユダヤ人の中に脈々と受け継がれ、今回の支援に繋がったのでしょうか。地域をそして国を超えた心のつながりを感じずにはいられません。

震災から 2 週間。何事もなかったかのように桜の花が開き始めました。計画停電もひと段落したので、全ての利用者様が参加できたわけではありませんが、4 月 13 日からおよそ 1 週間の日程でお花見を行いました。今回の誌面はお花見とおやつ作りが中心となります。

ご家族や知人の皆様にも多大なるご心配をお掛けしました。本誌の写真の中の皆様の笑顔で癒していただければと思います。

事務長：菊池





## 素敵な春

皆様と共に花見へ、4月1

4日に行ってきました。

東日本の震災による度重なる余震や計画停電による暗い夜など、これまでに受けた不安な気持ちを、いっぺんに忘れさせてくれる素晴らしいお花見日和でした。



雲のない青空  
暖かい春の日差し  
新緑の木々を揺らしながら吹いてくる爽やかな春風  
そして満開の桜

満開の桜を見ながらのお饅頭にジュース、楽しい昔の思い出などを語らいながら素適な時間を持てました。  
皆さんと撮影した写真は笑顔満開です。



公園で出会った幼稚園生達がおたまじやくしと遊ぶ姿に目を細められる姿や、鳥の声を間近に聞き春になったことを実感出来ました。

出口のないトンネルはない・春にならない冬はない・耐えられない試練を神は与えないなど言いますが、震災で被災した方々にも良い春が訪れる事を皆で祈りながら春を満喫し、満開の桜に心が洗われたようでした。



来年も素適な春を皆さんで迎えられますように……

又皆様に喜んで頂ける企画をたて、生活の質を高めていきたいと思っております。

花よりだんご…。そんな楽しい会話も増えたらいいですね。

2階介護:平井・徳増



## 最高の笑顔



デイケアでは、ご利用者の方々全員が参加できるように、4月7日から1週間かけてお花見に行ってきました。



昨年までは、柏尾川や宇田川など、比較的近いながらも何箇所かの桜を見に行つきましたが、今年は東日本大震災があり余震が続いているため、緊急時に対処しやすい理由から、ご近所の千秀公園を目的地としました。





例年は沢山の人で賑わっているのですが、今年はお花見している人は少なく、貸切のような状態でした。お天気にも恵まれ、桜は地震の事などなかったようにとてもきれいに花を咲かせていました。満開に咲いた桜を見上げた利用者様は、「綺麗ねー」と嬉しそうに声を出していました。

お茶とお菓子を召し上がり、体操や歩行練習等をかねて公園のグランドを1周したり、記念写真を撮りました。桜をバックに最高の笑顔が撮れたと思います。何十年振りかにブランコに乗り、童心に返った方もいます。来年は地震も落ち着き、安心してお花見が出来ることを心より願います。



明るい未来がきますように。  
通所介護:木村

三月初旬、お好み焼き・たこ焼きレクをご利用者様の協力のもとに開催しました。当日は会場設営のためにテーブル・椅子の移動をしました。セッティングにおいては男性ご利用者の積極的な協力を頂き、大変感謝しております。日常使用している食堂の風景が、白いテーブルクロスで一変し、まるでレストランの様に。いつもと雰囲気が違う楽しい異空間に変身させる事ができたのでは?



たこ焼き器とホットプレートを三ヵ所設置し、調理開始。具材を混ぜる段階でもご利用者様の大活躍に助けられ、職員も発奮。たこ焼きを焦がしてなるものか…と大汗をかきました。次にお好み焼きの一枚目を焼き始め、緊張する暇も無くひっくり返すタイミング。いよいよ手に汗を握りチャレンジするも、見事にヨレてしまい大失敗。ご参加いただいたご家族に、「味は変わらないから…」と大笑いされ、カッコよく焼く姿をお見せする予定だったのですが…日頃の家事の手抜きがたたりましたかね。



今となっては、悪戦苦闘の様子もドタバタかげんも、ご愛嬌と笑ってください。



ただ、何枚も焼くうちに、だんだん上手に焼けるようになり、「おいしいわよ、おかわりちょうどいい」との声も。ホッとするやら、うれしいやら。

単調になりがちな施設生活に、ささやかではありましたが、ご利用者様が参加できた楽しいレクを行う事ができたと思っております

3階介護:田山

# 先端技術

世の中では、スマートフォンが人気であると、度々ニュースなどで耳にします。私事になりますが、iPhoneと呼ばれる米国製の端末を使っています。最初は、色々とパソコンの様な事が出来る機能を、通勤時の暇つぶしに使おうという目的で購入した次第です。そして、実際に使っていると、アプリケーションと呼ばれる色々な機能を取り入れる事で、遊び以外にも様々な使用方法がある事に気付きました。最初にもっとも便利だと思ったことは、入力した文字を大きく表示し、耳の不自由な方に提示する事でコミュニケーションが図れた事です。これが意外に見やすい様で、事のほか便利に感じました。その後使っていくうちに、相手の生年月日を入力するだけで、年齢や西暦を瞬時に表示させたり、薬の作用や副作用を調べたり様々な場面で活躍し始めました。

またアプリケーション以外でも、好評であった事があります。それは、手元でインターネットが検索し表示できる事です。ご利用者の生まれ故郷を会話の中から調べ、地元の話題を提供したり、懐かしい田舎の風景を見せてあげることで思いのほか喜んで頂けました。また、ご利用者がお手玉をはじめ、鞠突き唄を歌いだしましたが、途中から歌詞が思い出せないようでした。

いちれつ談判破裂して  
日露戦争始まった  
さっさと逃げるは  
ロシアの兵  
死んでも尽くすは  
日本兵  
5万の兵を  
引き連れて…

当然、私は続きを知りませんでしたが、その場で調べ、「6人残して…」と教えて差し上げる事が出来ました。この先は結構過激な歌詞ですね。

今現在も使用していますが、次から次に新しい発見があり楽しんでいます。まさか、高齢者へのアプローチの手段になるとは思っていなかっただけに、驚きです。

次号へ続く。

## 消防部屋の秀さん

秀さんはと言えば、焼け焦げた小屋の戸を見つめてぼんやり突っ立っていた。それを取り込むようにして4、5人の大人たちが集まりだした。時々、首を左右に振ったり頷いたりして、必死に弁明しているようなやりとりを見ているうちに、僕は濡れネズミの様な格好の秀さんが哀れで、犯人扱いされているのではないかと同情さえ覚えずにいられなかった。マムシや正純君たちは秀さんをからかう様にはやし立てたが、すぐ後ろで腕組みをして睨んでいる校長先生には気付いていなかった。

その晩から、秀さんは高熱の為に寝込んでしまった。見舞いに行った祖母が言うには、診察に来た岡島先生が、風邪を引いただけなのですぐに良くなるだろうと話していたとのことだった。「お前も一度、行ったほうが良い」家が近所で時々家に遊びに来ることはあったが、秀さんとは特段に仲良くしていた訳ではなかった。祖母が進めるので、半ばしぶしぶ見舞いに行くことにした。部屋に通されてふすまを開けると、コンロにかけたヤカンのけたたましい蒸気音が僕を迎えた。布団に横たわっている秀さんを見下ろすと、首に長ネギを包んだ太い袋状の布が巻かれていた。ぜいぜいと咳き込みながら、何かを訴えるように不明瞭な言葉を断続的に呟き続けるのだったが、どういうわけか、モグラという単語だけは僕の耳にはつきりと聞き取ることが出来た。そして、その単語を呟くときだけ、秀さんの表情にはニヤニヤとした満面の笑みが浮かぶのだった。僕は、まさかモグラと風邪との関係など想像したことになかったから、首を傾げるばかりだった。後になって祖母から聞いて合点がいったが、モグラを捕らえて火であぶり、粉にすりつぶして熱さましの漢方薬に使うことがあったのだ。いつまでも秀さんのうめき声を聞いていても仕方が無かったので、僕は祖母から渡されたフルーツポンチの缶詰が入った紙袋を枕元に置くと、すぐさま部屋を飛び出し、小雪のちらつく中を凍えながら帰っていった。道々、モグラモグラと何度も呪文のように唱えながら。岡島先生の診断どおり、数日も経たずに秀さんは全快し、また村のあちこちを徘徊する姿を目にするようになった。



南部 圭(利用者様ペンネーム)